

## やさい作の展開と「地域農業経営」の構想

長 嶺 広 吉

(宮崎県総合農業試験場)

NAGAMINE, H.

## Some Observations on the Integration of Various Farms in the Region of Vegetable Production

## I

近年のやさい作の展開については、次のような特徴を確認することができる。

1. S町のA農家では、昭和43年頃までは、水稻・濃粉甘藷・ナタネ・小麦・モモ・温州ミカン・肉用牛(繁殖)・ハウスやさいなどが採用され(作目構成の未分化段階)、昭和46年頃までにナタネ・小麦が放棄、水稻(休閑)・濃粉甘藷・モモが縮少、肉用牛・ハウスやさいが拡大され(作目構成の分化段階)、昭和47年には濃粉甘藷の放棄、モモ・ミカンの放任、水稻(90a)・肉用牛(3頭)の現状維持とハウスやさいの拡大がなされた(作目構成の組織化段階)。そして、この段階で畑(60a)は酪農家やタバコ作農家へ貸付、水稻は田植作業の雇用やゆい、ビニル張作業の共同、ハウス用地の交換利用といった地域次元での対応がみられる。このように、先進的なやさい作農家における作目構成は未分化段階から分化段階を経て組織化段階に達している。

2. 県内の多くの事例では、作目構成の分化の段階と前後して土地基盤を整備している。主幹作目としての力を確立した食用甘藷では掘取機・いも洗機・トラクタ用畦立マルチャーなどの専用機の利用と地下式大型簡易貯蔵庫の設置により作目としての力は格段に強まった。ハウスやさいに於ける施設化・装置化の進展は作付規模の拡大と反収増を実現した。このようにして、やさい作の力は充実してきている(収益性の安定向上と作付可能面積の拡大がはかられてきている)。

3. 従来からやさい作の場合も個別経営を超越した地域的な広がり場における組織化がはかられてきた。〇〇園芸組合・農家群による共同育苗・施設園芸集中管理モデル圃地・農協による育苗の請負・農協による共同出荷・直販所による契約生産などがそれである。これらの

現実的意味は作目構成の分化→組織化過程における作目の機能強化の一つの方法であるとともに、生産の担い手たる農業者の主体性の分化→組織化の過程である点に見出せる。

## II

これらのことから、やさい作が健やかな発展をとげるための基本的な方向は、次の諸点にあると考える。すなわち、

「特定の地域にあって、やさい作は条件対応的にその力を生かすとともに、条件創出的にその力を涵養していくこと。つまり、

- 1 個別経営で特化された作目を一定の地域内で組織化する(作目構成の分化と組織化)。
- 2 作目はそれぞれの特性に応じた形でその力を涵養する(作目の機能強化)。
- 3 個別経営の主体性を止揚した生産・流通の地域的組織化をはかる(生産・流通の地域的組織化)。

ここで、三者は基本的には1と2は相互に矛盾し、3がそれを止揚する関係にあるが、現象的には、それぞれは構造的・歴史的に符合するはずである。すなわち、作目構成が組織化された段階には作目は相応に機械的に充実し、生産の担い手はその主体性が地域的に組織化されるはずである。

## III

このことは、従来の個別経営でより高い生産力を求めるには限界があり、それは地域次元で可能であるということ、つまり、一定の地域次元で営農活動を展開せざるを得ない必然性を意味する。それはとりもなおさず、「個別経営」を止揚したところの「地域農業経営」成立の端緒となる。